体験版

大和言葉小辞典

荒妙工房

大和言葉小辞典

（体験版）

編集方針

［表記方法］

この辞典は、上から順に「見出し語・漢字表記・意味（＋用例）」という表記で編集をしている。この時、例文の出典は文末に明記するようにしている。例を左に挙げる。

◆やまとことば【大和言葉】 昔ながらの言葉。
――私たちは普段、～を意識する機会があまりない

例外的な表記としては、

①「現在とは異なる漢字表記がある語」や、「漢字表記は現在と同じだが、読み方が違う語」の場合は意味が空白となっている。

②表記方法などが二つ以上ある場合は、「／」記号を用いてできるだけ記載している。

③読み方の補助については、横にルビを振るのではなく、県《あがた》 のように、《》記号を用いている。

［見出し語の選定］

見出し語の選定基準は、一口に言って「和語であること」である。本書は古語や「今はもう使わなくなった言葉全て」を蒐集しているのでなく、あくまで大和言葉のみを記録すべく編纂されたので、当然ながら古語であろうとも漢語の類は記載基準から外れる。

また、大和言葉であっても、現在でも使われているようなごくごく一般的なもの（例えば手だとか鎌、虫）は省いている。但し、それらの中でも現在では失われてしまった意味を持っているなどすれば、この限りではない。例えば「坂」という言葉には、斜面という意味の他に境界という意味も存在するため、本書では記載をしている。

【あ】

～aす（あす）　動詞の後について、貴族や皇族など敬意の高い者への敬語を作る接尾辞　例）遊ばす（お遊びなさる）＝遊ぶ＋aす　さ寝《な》す（お眠りになる）＝寝《ぬ》＋aす

あうら【足ト】　歩数で吉凶を占う占術の一種。

あかがり【輝】　あかぎれ

あかごま【赤駒】　毛の茶色い馬

あかつ【班つ】ひと所にあるものを分配する、わける。

あがつ【散つ／領つ】散らす、分配する　＜県《あがた》

あかとき【暁】　夜が明けるよりも一歩手前の、まだ暗い時間帯

あかときつゆ【暁露】　暁に草木に置かれる露

あかはだ【裸】

あからしまかぜ【暴風】勢いよくさっと吹く風、はやて。

あからをぶね【赤ら小舟】　船体を赤く塗った船。上代の官船は赤塗だった。赤は民俗的な考えからすれば災難を寄せ付けない色

あがり【吾許】　我が家、私の元

あぎ【我君】　親しみを込めた二人称

あきつ【蜻蛉】　とんぼ、かげろうなどのこと。アキヅとも。

あきつかみ【明つ神】　現人神、天皇

あきつしま【秋津島／蜻蛉島】　日本国の美称。収穫の多い秋を名付けることによって物資の豊富さを示す

あきのは【秋の葉】　特に紅葉

あく【飽く】　対象を十分に享受して、満ち足りること。

あくた【芥】　ごみ

あぐむ【足組む】　あぐらをかく

あけ【暁／天明】　夜が明けること

あけさる【明けさる】　夜があける

あざあざと【鮮鮮と】　はっきりと

あさい【朝寝】　朝になっても寝ていること

あざう【糾ふ】　くみあわせる・からみあわせる

あさかげ【朝影】　朝日の光

――冷えた夜も、～を感じるころになると（死者）

あさぐもり【朝曇】　朝に空がくもっていること

あさけくあさあけ　早朝
あささる【朝さる】　朝になる
あさづくひ【朝づく日】　朝方の日の光
あさなさな【朝な朝な】　毎朝毎朝
あさはふる【朝羽振る】　朝に波風が立つこと
あさびらき【朝開き】　朝になって舟をこぎだすこと
——〜漕ぎ出て我は（万上）
あさめ【朝目】　朝一番に見たもの。これで吉兆を占うなどする。
あさよひ【朝夕】
あさり【求食】　動物などがエサを探すこと。
あざる【鯑る】　腐る
あざる【荒る】　荒々しく取り乱す
あざれあふ　ふざけあう
——塩海のほとりにて、〜へり。
あししろ【足代】　足場、拠点
——山林仏教をはじめる最初の〜にっていた所だと（死者）
あした【朝】　夜の延長としての朝。
あしはやの【足早の】　速度が速い
あしび【葦火】　葦を燃料として燃やした火
あず【崩岸】　崩れたがけ
あぜか【何か】　なぜか
あそそに　ほのかに（薄々が縮まった言葉）
あとらふ【誂ふ】　頼む、注文する
——尼に〜へて末の句を（万上）
あなすゑ　足の先、転じて末裔
あなだま【足玉】　足首を飾る玉
あのと　足の音
あた　敵・賊
あだなり【婀娜なり】　（特に女が）艶めかしい
あだなふ【寇ふ】　はむかう
あぢまる　集まる。アヅマルとも。
あつかはし【暑かはし】　暑苦しい
あつしる　病が重くなる
——おへ給ひて、〜れたまふ（日一）

あづまをみな【東女】　東北地方の女。田舎者の女
あつもの【羹】　あたたかいお吸い物
あと　足
あどもふ【率ふ】　引きつれる
あなづる　侮る
あに【豈】　どうして
あはく【喘く】　激しく息をする、あえぐ
あはびだま【鰒玉】　真珠
あはむ】　軽蔑する
あはゆき【沫雪】　（春先などに降る）積もらずすぐ解ける
　ほのかな雪
あばる【荒る】　荒れすさぶ　＞あばら家
あふ【忍ふ】　耐える
あふさきるさに　あちこちへとふらふらすること
　――心の暇なく、～に思ひ乱れ（徒然草）
あへ【饗】　食事
あま【海人】　漁師、漁民《ぎょみん》
あまぎらふ【天霧らふ】空に霧が立ち込め、曇る。
あまぎり【雨霧】　きりさめ
あまけかぜ【雨気風】　湿気を含み独特の香りのする、雨前
　に吹く風
あまざはり【雨障】　雨によって外に出ることができないこ
と
　――～常する君はひさかたの（万上）
あましだり【雨滴り】　軒から下たる雨水
あまそぎる【天聳る】　峰や山が天高く空を削るようにある
あまてる【天光る】　空に輝く
　――ひさかたの～月（万下）
天橋【あまはし】　天と地上を往来するための梯子。天浮橋
　《あまのうきはし》とも。
あまま【雨間】　雨がまた降りそうな中雨が一時期やんでい
　る間
あまぢ【天道】　天の上の道、天への道、天体の通る道
あまつかぜ【天津風】　空吹く風
あまつかみ　特に、高天原におわす神
あまつしるし【天津瑞】　高天原生まれの神であることを示

す宝

あまづつみ【雨障み】　雨によって外に出ることができないこと　＝あまざはり

あまてる【天照る】　空に光っている

――ひさかたの～月は神代にか（万上）

あまなふ【和ふ】　妥協する

あまひ　桜の花びらのようにはかない少しの間

――木の花の～のみにいまさむ（古）

あまひれ【天領巾】　天女の身に着けている装飾布、転じてたなびく雲。アマツヒレとも。

あめ【天】

あめなる【天なる】　天にいる、天上にいます

――～や弟たなばたの項《うな》がせる（古）

あめのうみ【天の海】　広大な空

――～に雲の波たち（万上）

あめのやすのかは【天の安河】　高天原にある川

あめひと【天人】　天の原の住人

あもる【天降る】　神が天から降りること

あやす【落す】　（液体などを）したたらす

あやなし　わけがわからない

あやに　むやみに

あやひと【漢人】　当時の大陸から渡来した人の総称

あやまつ【過つ】　間違える

あやめ【漢女】　裁縫で暮らす女

あゆ【落ゆ】　落ちる

あよく【動く】　揺れる

あら～【荒～】　霊威や威力の発揮されている／乱暴なという意味を示す接頭辞【例）荒神、荒熊

あらき【荒木】　切り倒したままの木、皮をとっていない木材。

あらく【散く】　思い思いに散る

あらくさ　雑草

あらしね【荒稲】まだ籾を取り去ってないままの米

あらしを【荒男】　ますらお。立派な男

あらたへ【荒妙】　粗い素材で作られた布

あらたま【荒魂】　神々の恐ろしい側面

あらどこ【荒床】　寝床としての、波の激しい磯
あらびごころ【荒び心】　怒った状態の心
――吾子《わこ》の為丁《しおお》せなんだ～で（死者）
あらぶ【荒芒ぶ】　広々と荒れている
あらぶる【荒ぶる】　荒れすさぶ、始原的な状態にある
――～神どもを言向けはやし（古）
ありがよふ【有り通ふ】　いつも通う
――皇子の命の～ひ見しし（万上）
ありそうみ【荒磯海】　岩が露出して、波が荒い海
ありのひふき【桔梗】　キキョウ
ある【荒る】　荒れる
――ぬばたまの夜床も～らむ（万上）
ある【生る】　生える、生じる
あるみ【荒海】　荒れている海
あれます【あれ坐す】　（天皇が）この世にお現われになる
（天皇は生まれるとは言わなかった）
あわしほ【泡塩】　精製されてさらさらの塩【⇔荒塩
あわゆき【沫雪】　冬から春にかけての消えやすい雪。
あわを【沫緒】　糸の一種「緒」のより方
あをうま【青駒】　毛の灰色な馬
あをぎる【青耀る】　青くかすむ
あをぐも【青雲】　雲がなく晴れ渡っている空
あをたか【蒼鷹】　鷹狩に用いる大きな鷹
あをねろ【青嶺ろ】　青山
あをやぎ【青柳】　春に青く芽吹き始めた柳

【い】

い【胆】　内蔵。＝きも
い　睡眠
い【爾】　卑称の二人称。お前、あんた
～い　主語を示す助詞（強調の意味）。
――過ぎにし恋～乱れ来むかも（万下）
い～　動詞に付いてその語を強調する接頭辞　例）い隠る、
い立つ
いがき【蛛糸構】　蜘蛛の巣
いかくる【い隠る】　隠れる。「い」は接頭辞

いかづち　かみなり・とてつもない威力を持つもの
いきづく【息衝く】苦しく息を吐く、ため息をこぼす
いくさ　軍
いくり　海中の岩礁
いこふ【息ふ】休む
いさ【不知】さあどうだろうか
いさご【砂】砂
いささ～【細小～】ちょっとの、小さなという意味を示す
　例）いささ群竹
いさつ　激しく泣きわめく
いさな【勇魚】くじら
いさな　小魚
いざなふ【誘ふ】誘う、連れていく
いさむ【禁む】禁止する
いさよふ　行こうとするが躊躇う
いさらなみ　霧の異称（八雲御抄《やくもみしょう》より）
いさらみず【湿潦】雨後にできるたまりみず
　――庭に～す（風上）
いざる【膝行る】座りつつ、移動すること
いざる　漁をする
いざり【漁】漁。おそらく動詞形は「いざる」
いさを【勇男】豪傑
いし【稚し】若くあどけない
　――いにしへに国～しく（日一）
いしなみ【石浪】石でできた橋。
いすかし　物事が食い違っている、かみ合わない
いすすく　慌てふためく
　――美人驚きて立ち走り～き（古）
いそし【勤し】勤勉である
いそふ（競い合いように）働く
いそぶり【磯ぶり】磯に打ち付ける荒波
　――～の　寄するいそには年月も（土佐日記）
いたがる【甚がる】ほめる
　――これをのみ～り、物をのみ喰いて（土佐日記）
いたづき【染疾き／労き】苦労、骨折り、転じて病
いたぶる【甚振る】ひどく荒れる

いちはやぶ【逸早ぶ】　ちはやぶるに同じ。霊威が発揮されている状態
いつ【稜威】　勢いのある、威力がある
いつ【厳】　神聖なという意味の接頭辞
いつくし【厳し】　おごそかだ
いつき【斎き】　身を清め、神に仕えること
いつとせ　五年
いつはり【僞】　嘘
いづら　どこ
――見し人を～と問わば（万上）
いでたち【出立】　出発の準備
いでます【幸す】　お出かけになる
いでゆ【出湯】　温泉
いとど　コオロギの異名
いとふ【厭ふ】　嫌に思う
いとのきて　とりわけ
――世の中の厭けくつらく～痛き傷に
いなごまろ【蝗まろ】　精霊飛蝗《ショウリョウバッタ》の異名
いなだき【頂】　頂上
――～にきすめる玉は（万上）
いなづみ【稲積】　新撰としての稲をためておくために積んでいるもの
いにしへ【古】　「往にし方《へ》」から転じて、昔、過去
いはがね【石根】　巨石、大岩。イハネとも。
いはき【石木】　いわと木、転じて無口な様
いはくえ【岩崩】　岩が崩れた所
いはばしる【石走る】　水が岩の上を激しく流れる
いはひへ【忌瓮】　神に供えるために神酒を入れる甕
いはふ【齋ふ・忌ふ・慎ふ】　祝う。大切にする
いはほ【巌】　そびえる大きな岩
いはむ【満む】　満ち足りている
いはや【窟】　洞窟
いばゆ【嘶ゆ】　馬がなく
いはゐ【石井】　石で囲った井戸
いひ【飯】　たかれた米、ご飯。

いひかしく【飯炊く】　ご飯を炊く
いふかし　訝しい、怪しい
いぶせし【鬱悒し】　こころが晴れず、もやもやする
――あの～い女部屋には（死者）
いほ【五百】　数多くの物を表す言葉（単に五百を示しているのではない）。
いほへ【五百重】　幾多にも重なる
――天雲の～が下に隠り給ひぬ（万上）
いほつ【五百つ】　後ろに付くものがたくさんあることを示す修飾語　例）　いほつ鳥
いほる【庵る】　仮の宿を作る、宿る
――荒磯面《ありそも》に～りてみれば（万上）
いへついも【芋菜】　里芋
いま【今】　現在。また副詞として「すでに、新しく」　例）　今作る～＝新しく作った～
いまし【汝】　お前
いまに【い間に】　その間に
いめ【寝目】　夢
いめ【射目】　動物を狩る際に隠れる場所
いめひと【射目人】　弓矢で狩りをする人
いも【妹】　親愛の念が込められた女性に対する呼び名⇔兄《せ》
いもひ【斎】　ものいみ。
いらつ【苛つ】　焦る
いりがた【入り方】　日が没しようとしている時刻
いや【弥】　ますます
いやしく【弥重く】　ますます回数が増えていく
いやちこ【灼然】　明らかである
いやつぎつぎに　どんどん次から次へと
――～玉かづら絶ゆることなく（万上）
いやはて【弥終】　最終的に
――～にその妹伊邪那美命（古）
いやひけに【弥日異に】　日がたつにつれて、ますます
いよよ【愈】　そのうえ、いっそう
いよよかに【森々に】　植物が背を高く、多く繁茂する様子
――往々《ところどころ》～におのずからに山林《はや

し≫をなせり（風上）
いよいよますます【愈増々】　よりいっそうますます
いらつこ【郎子】　美しい男子
いらつめ【郎女】　美しい女子
いりひ【入日】　夕日
いる【没る】　沈む、水没する
いるか　入鹿魚
いろえ　兄
いろこ【魚鱗】　鱗
いろね　姉
いろは　母親
いろも　妹
いわき【石城】　岩窟。
いをさ　矢、あるいは小さな矢

【う】

う【座】　座る
～う【得】　～することのできる
うからびと　旅人
――才優れた～が、彼を乗り越して行くのに気がつかなかった（死者）
うから【親族】　身内
うがら　一族の外のもの。血縁関係のない、ほかの氏族
うかる【浮かる】　心が落ち着かない
うきけ【浮木】　いかだ
うきね【浮き宿】　流した涙に浮いてしまうほど深い悲しみをもって寝ること
――涙にぞ～をしける（万上）
うくたから【浮宝】　船の異称
うぐもつ【墳つ】　土地が盛り上がっていて肥沃である
うけ　穀物・食料
うけぐつ【穿沓】　穴の開いた靴
うさぎうま　ロバ（大陸経由で知られた可能性がある）
うし【厭し・倦し】　心がつらく苦しい。
うしはく【領く】　支配なさる
うしほ【海塩】　海水

うす【滅す】　なくなる
うすらひ【薄氷】　薄い氷
うそぶく【嘯く】　口をすぼめて物を言う、あるいは息を吐く
うたかた【泡沫】　水に浮かぶ泡、転じてはかないもの
うだく【抱く】　腕に抱く
うたて【転】　ますます
——下心吉し～このころ（万上）
うたて　異様に
——～思ほゆ（土佐日記）
うち【内】　「うつつ」と同じく、現実
うちきらす【打ち霧す】　雪、霧などが、空を一面曇らす
うちつけに　ただちに
——さらば、～に（土佐日記）
うちとよむ【打ち響む】　騒然とする
うちまもる【うち膽る】　じっと凝視する
うちわたす【打ち渡す】　あたり一面を眺める
うつしよ【顕界】　この世
うつせみ　この世の人・現世。この世界の生々しいからだ
うつたへに　まったく、直接
——～鳥ははまねど（万上）
うづなり【珍なり】　尊い、貴重である
うつはり【梁】　今でいう梁。建物の強度を増すために、地面と水平にして柱に架けられる
——ぼうと～に張り渡したついしたに（死者）
うてな【萼／台】　四方を見渡すために高くつくった壇
うな　首・うなじ
うなぐ【纓ぐ】　うなじにつける
うなさか【海界】　わたつみが治める、海の国
うはなり【後妻】　最初に娶った妻よりあとに娶った妻
うはへなし【表邉無し】　無情だ
うはゆひ【上結】　刀を腰につけるための紐
うばら　いばら
うぶすな【産土／本居】　生まれ故郷
うべ（も）【宜／諾】　なるほどもっとも
——春なれば～も咲きたる（万上）

うべし【宜し】　なるほどもっとも
うま～【味～】　「（味の）良い・貴い」などの意味を持つ接頭辞
うまい【味寝】　熟睡
うまし【可怜し】　姿が美しい
――物の色《かたち》～く、郷体《くにかた》甚《いた》く愛《めづ》らし（風上）
うましびと【円満し人】　すべて円満具足している人。文武両道だったり、才色兼備立ったりという時に用いる
うまびと【貴人】　身分の高い人
うみつぢ【海つ路】　海路
――～の和ぎなむ時も（万上）
うみはた【海畔】　海辺
うむ【倦む】　飽きる、嫌になる
うむぎ　はまぐり。ウムガイとも。
うも　芋
うら【卜】　占い
うら【占】　心、思い。単独ではほぼ用いられない
うらうらと【悠々と】　ゆったりと時が過ぎゆくように
――～と長い春の日も（死者）
うらかす　楽しませる
――～し給へども、猶哭く由《よし》を（風上）
うらがる【うら枯る】　草や枝の先端が枯れること
――一冬の～れを取り返さぬ柴木山も（死者）
うらさぶ【心荒ぶ】　心がすさぶ、楽しめない
うらどふ【占問】　占いをして答えを求める
うらぶる【快る】　わびしく憂う
うららか【麗らか】　日の光が優しくのどか。特に春の日に言う
うららなり【朗らなり】　明瞭である、のどかである
うらわかみ～うらわかし【うら若し】　花や女性などが若々しいので
うるわし　どこまでも完璧な美がある
うれ【末】　枝葉の先
うれたし　しゃくである、いまいましい
――～きや醜《しこ》ほととぎす（万上）

うれたむ【慨む】　鬱屈して憤る

【え】

え【兄】　年上の男性、あるいは女性
えし【良し】　「良し」の古形。
えせ　質が悪い、出来の悪い事
えだ【枝】　手足、四肢
えびかづら　ヤマブドウ、ブドウ
えも　（肯定の意味を添えて）よく～したものだ。（打消しの意味を添えて）～できない
――恋ふというは～名付けたり（万下）
えやみ　疫病
えらぐ【楽ぐ】　楽しみ笑う
えをとこ【好男】　あるべき姿である男、素晴らしい男

【お】

おいじたいでる【老舌出でる】　年老いて無意識に開いた口から舌がでる
――百年《ももとせ》に～てよよむとも（万上）
おいなみ【老次】　老齢になったころ
おう　トリカブト
おが【大鋸】　木を切り倒すときなどに用いる、大きな鋸。＜おがくず
おかみ【龗】　水神（たる龍神）。オガミとも。
おきさく【沖放く】　沖のほうに（船をこいで）遠くいく
おきそ　溜息
おきつ～【奥つ～】　奥のほうにあるという意味の接頭辞
おぎろなり【蹟ろなり】　広大である、深遠である
――～にめぐしとおもほす御心（日一）
おく　除く
おくか【奥香】　奥の方、遠いところ。
おくつき【奥墓】　墓、墓地
おくど【奥所】　奥のほう
おし～　動詞に付いて主にその意味を強める接頭辞
おしてる【押照る】　一面が照る
――わが庭に月押してれり（万上）

おせる【臨睨る】　上から下へ見下げる、見降す
おそし【鈍し】　（多く頭の働きが）鈍い
おぞましい【鈍ましい】　鈍い
おそり【恐り】　恐れるもの、心配ごと
おだやむ【穏やむ】　穏やかになる
おと【弟】　弟。年の若い人
おどろ【荊棘】　植物の、乱れ繁茂するところ
おひく【負い来】　持ってくる
おひし【大石】　大岩
おひて【追風】　追い風
おびと【首】　首長・統括者
おのづま【自妻】　わたしの配偶者（夫もいう）
おほ～【大】　大きい、立派である、偉大である、程度が大きいなどの接頭辞
――～氷雨をふらし（古）
おほ【白蛤】　白い蛤
おほうみ【大海】　日本海
おほかり【大雁】　ガチョウ
おほき【魁】　物事の根幹
――～なるあたすでに滅びて（日一）
おほくち　狼・やまいぬ。
おぼ　ぼんやりした～
おほつち【大地】　広大な土地
――～もとりつくさめど（万下）
おほと【大門】　海峡
おほとり【大鳥】　鶴やコウノトリなど、大型の鳥の総称
おほとる　（草の蔦などが）蔓延する、乱れて広がる
おほなり【凡なり】　いい加減な
おほなゐ　大地震
おほには【大庭】　宮廷の庭
おほにへ【大嘗】　天皇が新たに即位したときに催される大嘗祭
おほにら【大韮】　ニンニク
おほね　大根
おほひば【覆羽】　空を覆う羽の意味から、空を飛ぶ鳥の群れ

おほまえつぎみ【大臣】　天皇に使える高官のうち、大臣
おほみたから【百姓】　百姓、人民
——住める～は塩を火《や》きて（風上）
おぼめく【朧めく】　ぼんやりする、はっきりしなくなる
おほろかなり【凡ろかなり】　いい加減である
おほを【大峰】　高い峰、丘。
おほをそどり【大をそ鳥】　鳥の蔑称
おふ【竟ふ】　おえる
おみな【嫗】　老婆
おもかた【面形】　顔かたち、顔
おもさす【面刺す】　熱気や光などが顔を指す
おもしろし【何怜】　趣深い、すばらしい
おもちち【母父】　父母
おもぶるに【徐に】　ゆっくりと
——～に申してまおさく（日一）
おもむけ　相手を納得させる行為
——～已《すで》に畢《お》へて（風上）
おもわ【面輪】　顔
おやじ　同じ
およしを【老男】　老いた男
およづれ【逆言】　人を惑わす言葉
および　指
おらぶ【哭ぶ】　大声で泣き叫ぶ
おれ　卑称の二人称

【か】

か　鹿
か　所。例）ありか、すみか
かあを【香青】　青い
かいな【腕】　肩から肘までの間。にのうで。
かうこ　蚕。単にコとも。
かが【利】　利益、見返り
かがち【酸漿】　ほおずき
かがづらふ　からまる
かかふ【かか布】　ぼろい布きれ
かがふる【被る】　いただく

かがまる【勾る】　腰などをかがめる
かがやかし【輝かし】　まばゆい
かがよふ【赫ふ】　ちかちかと光り揺れる
かかやく　輝く
かかる　指のあかぎれなどが切れる
かきうつ【掻棄つ】　粗く捨ててしまう
かききらす【掻き霧らす】　霧が出て曇って来る
かきくらす【掻き暗す】　あたりが全く暗くなる
かぐ　ゆれ光る
かぐはし【香ぐはし】　（香りとともに）美しく心惹かれる
　ような
かくりょ【幽界】　あの世。
かぐろし【か黒し】　深い黒色である
かけ　にわとり
かげ【光・影】　光そのもの。光によって生じる像・人影
かげくさ【影草】　日陰に生える草
かけまくも【掛けまくも】　申し上げるのも恐れ多いが
かけらふ【翔経ふ】　空を飛びまわる
かこ【水手】　船頭、水夫
かざす　あるものを髪飾りをする
かざはや【風早】　風が強い。土地などにつく
　――〜の美保《みほ》の浦廻《うらみ》の
かしく【炊く】　お米を炊く
かしはて　使用人、料理人。カシハデとも。
かすむ【霞む】　霞がかる
かすむ【掠む】　奪い取る
かせ【甲羸／石陰子】うにの古称。
かそ　父親
かそいろは　父母
かそけし　光や音などがかすかな
かそふ【掠ふ】　奪い取る
かた【鹵】　塩を含む池
かたこひ【片恋】　片思い
かたさる【片去る】　片方による
かたしほ【堅塩】　まだ未完成の、塊になっている塩
かたす【堅州】　東北の地・死者の国

かたて【半手】　一方では
かたもひ【片垸】　片思い
かたゐ【乞食者】　馬鹿
かち【陸】　陸。転じて徒歩のこと
かちあるき　乗り物に頼らず徒歩でいくこと
――野山を、～した御娘ではなかった（死者）
かちは【堅磐】　まったく壊れることのない岩、かたいわの
短縮形
～かつ【勝】　接尾辞的に動詞に付いて、「～できる」を示す
かつがつ　どうにかこうにか
――～気持ちのくみ取れるところがあったのであろう（死者）
かづく【潜く】　水に潜る、あるいは泳ぐ
かなど【金門】　門
かならじ【必じ】　カリナラジの転じたもので、絶対そうなる。
かにかくに　何かにかこつけて
かには　桜（特にチョウジザクラ）
かにもかくにも　とにかく、どうであれ
かぬち【鍛人】　鍛冶職人
かねごと【予言】　約束事、誓い
かのしし　鹿
かはじり【川底】　川の下降
かはと【河音】　川の水が流れる音
かはなみ【川次】　川の流れ
かばね　むくろ、しかばね、死体
かはほり【蝙蝠】　蚊を食べることから、蝙蝠
かひ【生卵】　鳥の卵、あるいは繭。カヒコとも。
――うぐいすの～の中に（万上）
かび　イネの穂先
かぶす　うなだれる
かほばな【貌花】　美しい女性を形容する言葉。本来は植物を指していた。
かまける【感ける】　染まる、感動する
――だんだん得体の知れぬ村の風に～て（死者）

かまし【姦し／譁し】　うるさい、やかましい
かまめ【鴟】　かもめ
かみさぶ【神さぶ】　まったく神らしい（「さぶ」はもとは「錆ぶ」ではない）
かみずる　上ずる、気が動転する
――言い難い恐怖に～った女たちは
かむ【醸む】　酒を醸造する。醸《かも》す
かむこと【神功】　神としてのお仕事
かむさが【神性】　神の性格
――是～そこなひそこなひ（日一）
かむづまる【神留る】　神が鎮座される
かむとき【霹靂】　雷が落ちること
かむなび【神奈備】　神が天下りしてくる場所
かむはぶる【神葬る】　神としてふさわしいよう、また神を葬るように葬る
かむぶ【神備】　神々しくなる、古くなる
かむみそ【神衣】　神のお召しになる衣
かもかも【左も右も】　とにかく、どのようにも
――～すらく君ゆえにこそ
かやの　草野
かよひぢ【通道】　通路、また当時の公道
から【韓】　韓国
から　木や草の茎・幹
から【柄】　そのものの本質、本体、様子
からいゐ　鶏頭（植物）
からと【乾跡】　狩猟鳥獣の乾いた足あと（乾いているということは、獲物が近くにいる可能性が低いということ）
～がり　（行く、遣るなど移動を意味する言葉を伴い、人称代名詞などを受けて）～のところ
――妹～と、我が行く道の、川しあれば、つくめ結ぶと、夜ぞ更けにける（万上）
かる【離る】　離れる、分かれる

［き］

き【木】　（強い表現）匹。　例）一木《ひとつき》
き　酒の古形

きぎす　雉のこと。キザサ、キギシとも。
ききふるし【聞き古し】何度も聞いたことがあり、珍しくない。
きくるま【輪轜車】　棺を乗せた車
きさ　動物のゾウ
きざはし　階段
きさんじ【気散じ】きばらし、慰み
きし【崖】　切り立ったところ、崖
きしろふ【軋ろふ】揉み合い争う、摩擦を起こす
きすめる【蔵める／著統める】　大切に納める。隠し持つ。（＝藏む）
きそ【昨夜】　昨日、昨晩
きぞのよ【昨の夜】昨夜を強調した言い方。
きそふ【著襲ふ】　重ね着する
きだ【段】　段、分かれ目
きたなし　けがれている
きたなむ【汚む】汚いと思う
きたます【懲ます】懲らしめなさる
きたむ【懲む】懲らしめる。（鍛ふと同根か？）
きと　急に、急にはっと
きなるいづみ【黄なる泉】黄泉、つまりあの世。
きなるなみだ【黄なる涙】人間が流す涙を「紅の涙」というのに対して、動物の流す涙。
きのかた【気の方】神経衰弱、心の病み
きのふ【昨日】前日、また前日の夜、一昨晩
きはやかに【際やかに】（輪郭などが）際立ってくっきりとして
――花橘の、月影にいと～に見ゆる（栄花）
きふ【来経】　時が経つ
きみがね【君がね】将来君主となるべきお方
きむすめ【生娘】処女
きめごまか【肌理細か】肌のきめが細かい
きもたましひ【肝魂】気力、消費、精魂。心。
きらきらし　輝いている、また美しく整然とした様子
――そのさまの～しさに（万上）
きらふ【霧らふ】　霧があたりに立ち込める

きりび【切り火】　火打石を打って打ち出した火
きる【霧る】　霧が立ち込める

【く】

〜く　動詞を名詞化する、ク語法。〜ということ（正確には単純にクをつければいいということではないが、ここでは説明は控える）。例えば「いはく＝言うこと」「思わく＝思うこと」
く【木】　木《き》の古形
くう【壊う】　壊れる
——築《つ》きては〜えて
くえびこ　かかし
くが【陸】　陸地
くがね【金】　黄金《こがね》
くく【漏く】　もれる
——たなまたより〜き出で（古）
くぐまる【跼まる】　かがむ
くくむ【含む】　外にあるものを何らかの内部に包むこと
くくる【泳る】　泳ぐ
くさぐき【草潜】　草の影に潜り隠れること
くさびら　茸《きのこ》
くさまくら【草枕】　草を枕にしたもの、旅先で寝ること、旅
——家にあれば笥《け》に盛る飯《いひ》を〜旅にしあれば（万上）
くさる【爛る】　腸が腐るほどに、美味しい
——その味《あぢはひ》〜がごとく（風上）
くしみたま【奇魂】　不思議な神霊
くじる【抉る】　えぐり掘る
くしろ　うでわ
くすし【霊し／神し】　不思議な、神秘的な
くすし【医者】
——よき友三つあり。一つには、物くるる友。二つには〜（徒然草）
くすばし【神ばし／奇ばし】　珍しい、不思議だ
くすりゆ【薬湯】　薬用効能のある温泉

くだけ　何らかのかけら。　例）雪の砕け＝雪のくだけたかけら。
くたす【腐す】　腐らせる
くたち　夜が更けること
くたつ【降つ】　日が落ちる、転じて衰えゆく
くちくさ【腐草】　蛍（昔は枯れた草が蛍になると考えられていた）
くちとし【口疾し】　受け答えが速い
くちなは　ヘビ
くちばみ　マムシ
くつ【朽つ】　腐る
くな　尻
くに【国／地／久邇】　土、国土
くにつかみ【祇】　高天原ではなく、人類が住まうこの土地におわす神。
くにばら　平原など、平らでひろい地
くにひと　（その特定の地方の）住人
くにまぎ【国まぎ】　住みやすい国を求めゆくこと
くぬち【国内】　国中
くはし【麗し】　うつくしい
きほふ【競ふ】　争う、競う
くま　神饌としての米
くまくまし　奥深く、暗い様子
くまど　物陰になっているところ
くものい　蜘蛛の巣
くもゐ【雲居】　雲、空
くゆ【崩ゆ】　くずれる、朽ちる
くにつかみ　祇なほや～えなむ（万上）
くるつひ【明日／来つ日】　翌日
～ぐるめ　～ごと。例）翼ぐるめ（＝翼ごとすべて）
くるめく【転く】　まわる。クロメクとも。
くれ【塊】　何らかのひとかたまり
くにつかみ　祇一本の草、一一～《ひとくれ》の石すら（死者）
くれき【材木】　山から材木として取った木
くろがね　鉄

くろこま【黒駒】　黒毛の馬

【け】

け【気】　息
げ　　穀物
けがらふ【穢らふ】けがれる、不浄なものに触れる。
けけし　よそよそしい
けころも【褻衣】　普段着
けざやか　見る対象がはっきりとしている。はっきり違っている。
けし【異し】　他と違う
けしかり【怪しかり】（けしくあり）の略で、あやしい。
けす【着す】お召しになる
けすらふ【擬ふ】化粧をする、おめかしする、よそおう。
けだし【蓋し】　もし・おそらくなど、仮想と推測の意味を持つ副詞
けつ【消つ】　消す
けづる【梳る】　髪の毛をとかす
けどほし【気遠し】　遠い
けならぶ【日並ぶ】　日を重ねる
けなり【殊なり】普通ではないという意味から転じて、羨ましい。＞けなりがる
げに【実に】その通りである。
けぶり【烟】　煙
けやけし【尤けし】　いような
けやすし【消易し】　消えやすい

【こ】

こ　　なまこ
こいまろぶ【転がりまわる
こきだし【幾許し】　（程度が）とても甚だしい
――行く道〜くも荒れにける（万上）
こごし【磊磊し】　ごつごつと固まっている
――島国の宜しき国と〜かも（万上）
ここば　たいそう、とても
こころ　意

こころいれ【心入れ】　心遣い
こころぐし【情ぐし／心ぐし】　心が苦しい、せつない
こころど【心神】　魂、気力など、しっかりとした心。
こころどもなし【心神も無し】　気持ちが不安定だ
――君いまさねば～（万上）
こころなぐ【心和ぐ】　心が穏やかになる
こころやり【心やり】　気晴らし
こぞ　昨年
こぞる【挙る】　皆集める、そろえる
こじる　こじあけ（ようとす）る
こだかし【木高し】　立ち並ぶ木々が高い
こだち【木立】　立ち並ぶ木々
こだる【木足る】　木が繁茂し、垂れ下がる
こち【東風】　（春）東方から吹く風
こちごちの】　あちこちの、そここの
こちたし【言痛し】　人のいう噂が酷い様子
――～けば、小泊瀬《をはせつ》山の（風）
こつ　木のくず
こづたふ【木伝ふ】　鳥などが枝から枝へ移る
ことさらに【故に】　わざと
ことととふ【言問ふ】　尋ねる
ことはかり【事許り】　はかりごと、取り計らい
ことほぐ【寿ぐ】　祝いの言葉を唱える。ほぐ。
ことむく　征服する、支配する
こなみ【前妻】　正妻
こぬれ【木末】　枝の先端
このえ　木の枝
このかた【此方】　こっち側、こっちのほう
このくれ【木の暗】　木の下の暗いところ
このね　木の根っこ
このみ【菓子】　木の実
こはら【木原】　気がたくさん生えている場所
こひぢ　泥
こひのむ【乞い祈む】　神に祈り頼む
こひまろぶ【臥い転ぶ】　ころげまわる
――～び、ひづち泣けども（万上）

こひる【小昼】　正午より少し前の時間帯。（コビルとも）
こほし【恋し】　「こいし」の古形
こぼつ【壊つ】　壊す、破る
こほろぎ【蟋蟀】　上代においては、秋になく松虫やコオロギの総称
こまくら【木枕】　木製の枕
こみ【澪】　溜まり水
こみら【小韮】　ニラ
こむ【子産】　子供を産む
こむら【木群】　木々の群生する場所。
——近い端山の～で、羽振《はぶ》きの音を立て始めている（死者）
こも　鴨
こもりえ【隠江】　隠れて見えないようになっている入り江、磯
こもりづま【隠り妻】　人目に付くといけない関係であるが故に家にこもっている妻
こやす【臥やす】　横におなりになる
こゆ【臥ゆ】　横になる
こる【凝る】　凍る
こるもは　テングサ
～ごろ【頃】　日や年などを前につけて、数日数年などを示す
ころすつみ　死刑
ころふ【嘖ふ】　責める、大声でおこる
ころもで【衣手】　衣類の袖
こわじり【声尻】　音の後ろのほう、語尾

付録

枕詞一覧

（体験版）

編集方針

［表記方法］
付録の枕詞一覧では、上から順に「枕詞・漢字表記・かかる語句・意味」の順で表記している。つまり、左にあるような形となる。

●まくらことば【枕詞】「かかる語句」　意味

枕詞にかかる語句は複数ある場合が多いので、その場合は出来るだけ全てを記載するようにした。
なお、枕詞は「古来から伝わる決まりきった語句」として受け継がれてきたものであるから、万葉や平安の時代には既にその意味を喪失し、音や文字の形など形式的な要素としてのみ扱われ、現在においてもなおその意味が不明なものが多々ある。その場合、参照した書籍には意味が書かれていないものもあったので、そういう語には私が独自に考察を行い、導き出した意味を記載した。そのしるしとして「◆」を用いている。

あかねさし【茜指し】「照る」茜色の光が鮮やかに刺し照る
あかねさす【茜刺】「日／昼」茜色の光が鮮やかに刺し照る
あかひもの【赤紐の】「長し」古代の神事に用いられる長い赤紐のように
あかほしの【明星の】「明く／飽く」夜が明ける朝方に出てくる明星のように
あからひく【赤羅引く】「朝／肌／日」赤さを持つ朝の日の光
あきかぜの【秋風の】「吹く／山吹」山吹を撫でるようにして吹く秋の風
あきぎりの【秋霧の】「立つ／間垣」立ち込めたそのさまがまるで垣のような秋霧
あきぐさの【秋草の】「結ぶ」大切な人同士で紐や秋の草を結ぶ習慣のように
あきつかみ【あきつ神】「吾大君」現在に生きる現人神たる天皇は
あきつしま【秋津島】「大和／倭」トンボの島
あきつばの【蜻蛉羽の】「袖」きらきら透けて美しいトンボの羽のような
あきのたの【秋の田の】「穂／往ね」秋の田に植わる穂や稲ではないが、行ってしまった
あきのはの【秋の葉の】「にほふ」秋の紅葉の「にほふ(美しく照り映える)」ように
あきのよの【秋の夜の】「長き思い」長い秋の夜ではないが、長く思うこの思い
あきやまの【秋山の】「したふ／色なつかし」美しい紅葉のある秋野山
あくたびの【芥火の】「飽く」塵を燃やすあくた火ではないが、飽く
あけごろも「明けなば」赤い衣のあけごろもではないが、明ける
あさがすみ【朝霞】「八重／春日／ほのか／鹿火」何重にも重なった朝に立つ霞
あさがみの【朝髪の】「思い乱れて」起き抜けのボサボサの髪のように思い乱れる
あさぎりの【朝霧の】「思ひまどふ／乱る」朝に立ち込める霧

あさごほり【朝氷】「(心)とけず」朝にはまだ溶けていない朝の氷
　ではないが、解けない心
あさしもの【朝霜の】「消え」日光で消えやすい、朝に降りてい
　る霜
あさどりの【朝鳥の】「朝立ち／通ふ」朝に巣立ち、飛びだす鳥
あさぢふの【浅茅生の】「小野」ちがやの生える野
あさづくよ【朝月夜】「さやかに」はっきりと(さやかに)見える有
　明の月
あさつゆの【朝露の】「消え／命」消えやすい朝に付く露
あさもよし【麻裳よし】「紀（地名)」麻製の裳の品質が大変よろ
　しい紀
あさはぶり【朝はぶり】「波の音」よく朝に吹く風によって怒る
　波や音
あさひの【朝日の】「ゑみ栄え」朝日のように明るい笑み
あしがきの【葦垣の】「ふりにし里／乱れて」葦で作られた垣は
　古くなりやすく、また乱れやすい、その葦垣ではないが
あしがもの【葦鴨の】「うち群れ」葦が生えた水辺に群れている
　鴨
あしのねの【葦の根の】「ねころも」葦の根ではないが、ねんご
　ろな
あしびきの「山／峰」足がひけるほど険しい（山）
あしびなす【馬酔木なす】「栄ゆ」栄えるようにたくさん咲くア
　シビの花のように
あすかがわ【明日香川】「明日」固有名詞の明日香川ではないが、
　明日に
あぢさはふ「枕／目／夜昼」◆「あは道さ這う（「さ」は接頭辞)」
　と理解して、ああと感嘆してしまうような霊威に満ちた道を、這
　いまわる
あたまもる「筑紫」防人を置いて外敵から守っていた筑紫
あぢむらの【あぢ群の】「通ふ／騒く」飛び交い、鳴き騒ぐアジカ
　モの群れ
あづさゆみ【梓弓】「張る／春」
あまぐもの【天雲の】「たゆたひ来れば／ゆきかへり」漂って行
　ったり来たりする空の雲

あまざかる【天離る】　「鄙」天から遠い
あまだむ【天飛む】　「軽」軽やかに、空を飛ぶ
あまづたふ【天通ふ】　「日／入り日」空を行く
あまつみず【天つ水】　「仰ぎて待つ」旱の際に雨を望むように
あまてるや【天照や】　「日」空に光り輝く
あまとぶや【天飛ぶや】　「鳥／雁／軽《かる》（地名）」空を飛ぶ
あまのはら【天の原】　「富士／ふりさけ見る」この大空、そして
　その上にある、神々のいます高天原
あまびこの【天彦の】　「音羽の山／訪れ」空に響く音のアマビコ
　ではないが、音羽の山／訪れる
あもりつく【天降りつく】　「天の香具山／神の香具山」天から降
　りついたという言い伝えがある（香久山）
あめつちの【天地の「神」天地をお創りになった神
あらがねの【荒金の】　「土」まだ精錬していないままの金属のある土
あらがひの　「荒き」（あらがひは競走の意味で）荒々しい競走
あらたへの【荒妙の】　「藤」目の荒い藤でできた布
あらたまの【新玉の／荒玉の】　「年／月／日／春」◆あらたまり、
　新しくなる年や、命が新しく膨らむ春
あられふり【霰降り】　「鹿島／杵島（ともに地名）」霰がきしきし
　と音を立てて降るのではないが
ありきぬの【あり衣の】　「三重」重ね着をする絹の衣類ではないが
ありそなみ【荒磯浪】　「ありても」ありそ（荒磯）の波ではないが、
　〇〇がありても
ありそまつ【荒磯松】　「吾を待つ」荒磯に生える松ではないが、
　私（あ）を待つ
あわゆきの【沫雪の】　「わか」繊細ですぐなくなりそうな柔らか
　な雪のように
あをくもの【青雲の】　「出で来」空ゆく雲が出てくる
あをによし【青丹よし】　「奈良」奈良で採れる青土がよい質である
あをふちの【青淵の】　「深き」とても深い水の青い淵
あをやぎの【青柳の】　「細き眉根／いと（副詞）／葛城山」その

枝を鬘とし、葉が糸のような若い柳よ
いかりおろし「いかにして」碇を下ろすではないが、いかにして
いさりびの【漁火の】「穂／仄か」仄かな漁火の明かりではないが
いさなとり【勇魚捕り】「海／浜」捕鯨する
いさなの【勇魚の】「勇ましく」鯨のように勇ましく
いさりびの【漁火の】「ほのかに」ほのかに光る漁火のように
いしまくら【石枕】「苔むすまで」枕にしている石に苔が生えるまで
いすくはし【いすく美し】「鯨」魚として素晴らしい鯨
いそがいの【磯貝の】「片恋に」磯に落ちている貝は往々にして片方しかないように、片思いの
いそのかみ【石上】「降る／振る／古る」石上布留の
いちしばの【いち柴の】「いつしか」イチイの木の茂った場所(いちしば)ではないが、いつしか
いなのめの【寝なの目の】「明け」寝ぼけ眼を開けるでは無いが、夜が開ける
いなぶねの【稲舟の】「否」稲を運ぶ舟ではないが、否《いな》
いぬじもの【犬じもの】「道に臥して」犬のように道に行き倒れて
いめたてて【射目立てて】「跡見（地名）」動物から隠れながら足跡などを探す、その跡を見る行為ではないが
いはばしる【石走る】「滝／垂水《たるみ》」石の上を行きよいよく水が流れゆく
いはぶちの【石淵の】「籠る」石を置いて囲った淵のように籠る
いへつとり【家つ鳥】「かけ」家の庭で飼っている鶏(かけ)
いゆししの【射ゆ鹿の】「心を痛み」弓で射抜かれた鹿を思うと心が痛い
いりひなす【入り日なす】「隠る」日が沈むように、死にゆく
うきくさの【浮草の】「浮たる恋／憂き」浮草ではないが、どうしようもない浮いた恋／憂鬱な状態
うきぶねの【浮舟の】「焦がれて」漕がれる舟ではないが、思い焦がれる
うぐひすの「春になるらし」鶯が現れて春になってきた

うすらひの【薄氷の】　「薄きこころ」薄い氷のように薄い心
うたかたの　「消えて」泡のように儚く消える
うちなびく　「春／春の柳／黒髪」うちなびく草木の揺れる春や春の柳、また黒髪
うづらどり【鶉鳥】　「領巾《ひれ》」領巾をかけているような頭の模様のうずらではないが
うづらなく【鶉鳴く】　「古りにし里／人の古屋」荒れて草地の多い場所に住む鶉が鳴くような場所ではないが
うちそを【打ち麻】　「をみ」叩いて柔らかくした麻
うちひさす【打ち日さす】　「都／宮」日の光がよく射す
うちなびく【打ち靡く】　「草／黒髪」風になびく
うつそみの【現臣の】　「人」この世にいきる人
うつゆふの【内木綿の】　「狭／こもる」◆高価な木綿も、薦とおなじ植物からできている、その薦ではないが
うまごりの　「あやに」美しく織られた糸(あや)の集合である布ではないが、とても(あやに)
うまさけ【味酒】　「三輪」味の良い神酒《みわ》ではないが、三輪山は
うまじもの【馬じもの】　「縄とりつけ」縄を取り付けられた馬ではないが、そのように縄で繋がれた
うもれぎの【埋もれ木の】　「下／人知れぬ」地中に埋まり、見えない埋もれ木のように
おきつなみ【沖つ波】　「「競《きほ》ふ／頻《し》く／高し／立つ」ある時は高く立ち、あるときは競うようにぶつかり合う、沖に立つ波のように
おくやまの【奥山の】　「深き心」深い山のように深い心
おしてる【押光る】　「難波」海が日の光を受けて強く照る
おちがみの【落ち髪の】　「乱れて物を思ふ」床に落ちた女の長い髪が乱れているように
おふをよし【大魚よし】　「鮪《しび》」大きく素晴らしいマグロ
おほくちの【大口の】　「真神の原」昔はマガミと呼ばれた大きな口の狼ではないが
おほとりの【大鳥の】　「羽易《はがひ》(地名)」立派な鳥、その羽が交差する羽交いではないが

おほによし　「鮪(しび)」大きく姿の良い鮪
おほぶねの【大船の】　「津／渡り」立派な船が停泊するその場所
かがみなす【鏡なす】　「思ふ」鏡のように大切に（思う）
かがりびの【篝火の】　「影」篝火ではないが、影が
かきこゆる【垣超ゆる】　「犬」垣根を超える犬
かきつばた　「匂へる妹／匂へる君かきつばた(花)のように美しく照り映える愛しい人よ
かきほなす【垣穂なす】　「人／人言」多くの人が立ち並んでできた人垣？
かぎろひの【陽炎の】　「春」春によく見られる陽炎
かぎろひの【輝火の】　「燃ゆる」輝いて燃える火
かくなわに【結果に】　「思ひ乱れて」かくなわ(昔の曲がりくねったお菓子)のように曲がって乱れるように思う
かけはしの【掛橋の】　「危なき道」桟橋の上のように危ない道
かげろふの　「ほのかに見えし」微かな陽炎(あるいは蜉蝣)のようにほのかに見える
かごじもの【鹿子じもの】　「ひとり」一匹のことが多い鹿のこのように一人
かしのみの　「ひとり」実をひとつくらいしか付けない樫のように一人
かしはぎの【柏木の】　「洩り」柏木の森ではないが、洩れる
かすみたつ【霞立つ】　「春日」霞が出てくる
かぜのとの【風の音の】　「遠き我妹」遠くから聞こえる風の音のように遠くにいる愛しい人
かたいとの【かた絲の】　「時々《よりより》／夜」より合わせる前の片糸をより合わせるではないが「時々」／夜に
かたしほの【堅塩の】　「からく」未精錬の塩のようにからい、当たりが強い
かぢのとの【かじの音の】　「つばらつばら」船を櫂で漕ぐときにつぶつぶなるように、つばらつばらに(極めて)
かはぎしの【河岸の】　「待つ」河岸によく生えている松ではないが、待つ
かはなみの【河波の】　「並」川にたつ波ではないが、並の
かはやぎの【川柳の】　「懇ろ」特に根を張る川柳の根っこではな

いが、懇ろな
かほばなの「寝らむ」日中よく咲き、夜には萎むかおばなのよう
寝る
かみかぜや（の）【神風や（の）】「伊勢／五十鈴川／山田の原」
神のいます伊勢に吹く強い風
かむごとの「たたり」神の起こす祟りではないが、糸を繰るたた
り(装置)
かやりびの【蚊遣火の】「悔ゆる／下燃え」燻る蚊遣り火ではな
いが、悔いる／下が燃える
からくにの【韓国の】「辛く」韓国ではないが、辛い、当たりの
強い
からころも【唐衣】「袖」袖がなくてはならない衣
からなづな【唐薺】「なづさはむ」なずな（ぺんぺん草）でなは
いが、慣れ親しむ
かりこもの【刈薦の】「乱れ」刈り取った薦が乱れているように
かりごろも【狩衣】「かけて／きて」狩の時に着る服ではないが、
掛ける／着る
かるくさの【刈草の】「つかの間」刈った草の束ではないが、つ
かの間の
きくのはな【菊の花】「聞くに」菊の花ではないが、聞くところ
によると
きみがよの【君が代の】「長《なが》／遥か」長く会ってほしい
天皇の統治する時代
きもむかふ【肝向かふ】「心」肝と向かい合っている心臓のよう
に
きへゆきの【消雪の】「早く消へ」雪のように早く消える
くさづつみ「病」瘡(くさ)やつつみ(病)
くさまくら【草枕】「旅」草をまとめて枕にしたもの
くずのはの【葛の葉の】「恨み」風に吹かれて裏の白い部分が見
える葛の葉ではないが、恨む
くそかずら【くそ葛】「絶ゆることなく」くそ葛の長く続く蔓の
ようにたえる事ない
くものいの【蜘蛛の巣の】「心細さ」蜘蛛の巣の糸のように細い
心の状態

くもりびの【曇り日の】　「影と」翳っている曇りの日のように
くもりよの【曇り夜の】　「惑へる」ただでさえ周りの見えない夜
より更に迷いやすい曇った夜のように
くもゐなす【雲居なす】　「心いざよひ／遠」雲のようにフラフラ
する心／遠い
くらげなす　「漂へる」水を漂うくらげのように
くりのみの【栗の実の】　「三つ」三つ実がある栗のように
くるべきに　「掛けて寄らむ」くるべき(糸を繰る道具)で糸を掛けて
繰るではないが、情をかけて近くに寄せたい
くれたけの【呉竹の】　「世々」節(よ)と節が近い呉竹(若い竹)では
ないが、世々に
くれなゐの【紅の】　「色／浅／うつし／」色鮮やかな紅
けごろもを【毛衣を】　「春」毛皮を張って作られる毛衣ではない
が、春
けふけふと【今日今日と】　「飛鳥」今日に続く明日ではないが、
飛鳥
こがらしの【凩の】　「秋の初風」秋の最初に吹く風であるこがら
し(本来こがらしは秋の末に吹く風であるが、誤って定着したら
しい)
こぐふねの【漕ぐ舟の】　「浮たる恋」水面を行く船のように浮つ
いた恋
こしほぞの【腰細の】　「すがる少女《をとめ》」腰の細いすがる(腰
のくびれた蜂)のような乙女
こづみなす　「心よりぬ」水に浮くこずみ(木屑、木の破片)が波によ
って1ヶ所に集まるように、心が寄る
ことだまの【言霊の】　「八十のちまたの」あらゆる場面に広くあ
る言霊ではないが、たくさんのちまた(道の分かれ道)
このくれの【木の暗の】　「繁き思ひ」木のくれ(木陰)のように多い
この想い
このめはる【この芽はる】　「春」芽が張る季節である春
こまつるぎ【高麗剣／狛剣】　「輪」高麗の剣の柄には輪がある
こまにしき【高麗錦】　「紐」多く高麗の布を用いて作っていた紐
こもりごひ　「いきづき」人知れず思い沈んで溜息（いきづき）を
する

こもりぬの　「行方を知らず」こもりぬ（草などに覆われて見えない沼）にとらわれて行方が分からない

『大和言葉小辞典　体験版』
令和五年（２０２３年）六月二十六日
第一版（ver1.0）　発行

製作：荒妙工房
編者：凪常草月
連絡先：messem@akatan.sakuratan.com